

永田町でここ最近、黒幕的にちらつき続
けているのが、青木幹雄・元自民党参院議
員会長の存在だ。二〇一〇年に政界を引退
したが、今でも東京・平河町の砂防会館に
個人事務所を構え、来客が絶えないという。

その青木氏が安倍晋三首相について語っ
たとされるこんな発言が、春以降、国会周
辺を駆けめぐった。

「無理しすぎだ。落ち着いてやらんとい
かんわね」（四月十八日付、読売新聞）

安倍首相が集団的自衛権の容認に向け、
憲法解釈の変更を急いでいることについて
の警告の言葉だった。

青木氏は、政治家や新聞記者などの来訪
者に、同じキーワードを繰り返すことが多
い。今回も首相に伝わることを意識して、
複数の人間に意図的にそう漏らしたのだろ
う。「わね」という独特の島根弁が、青
木氏のリアルな肉声を感じさせる。

すわ、参院自民党が「反安倍」で臨戦態
勢か。そう書いた新聞も少なくなかった。
が、そうした空気も、じきにしぼんだ。青
木氏にも、参院自民党にも、かつての勢
いはない。そんな揺さぶりでは、びくともし
ないのが今の安倍政権だ。

「ドン」と呼ばれた青木氏は、政局の府・
参院の象徴的な存在だった。

行動原理は単純だ。自身の権力維持を最
大の目的とする。利益誘導の権化であるに
もかわらず、小泉純一郎元首相と手を結

ねじれが懐かしい

んだ。政治が権力闘争である以上、当然と
割り切っている。そのクールでぶれない態
度が、周囲に凄みを感じさせた。そして一
筋縄でいかない長老として、時の政権をた
びたび揺さぶった。

そんな青木氏がクローズアップされるの
は、やはり安倍政権を面白くなく思ってい
る勢力が政界に一定程度いるからだろう。

世論動向に敏感だった青木氏は現役時代か
ら、憲法改正や教育基本法改正などに熱心
な理念型の安倍氏を不安視していた。同じ
思いを抱く政治家が、青木氏の言葉を喧伝
することで、政権をけん制している感じも
うかがえる。

しかし、それは、かつての実力者の幻影
に頼らざるを得ないほど、首相に逆らえる
勢力が消えた自民党の現状を浮き彫りにも
している。気がつけば、自民党の中に安倍
首相に対抗しうる「実力者」と呼べるよう
な政治家はもう一人もいない。一党の中に
右から左まで多様な意見があつて、その議
論の深みによつて長期政権を維持してきた
かつての自民党の姿はもはや、ない。

参院が政局の府と呼ばれるようになった
のは、一九八九年の参院選で自民党が過半
数割れし、参院の帰趨が政権の命運を握る
ようになってからだ。歴代の政権は、腫れ
物に触るように参院の意向を気にするのが
常態化した。青木氏のようなやつかいな政
治家を誕生させたのはこの衆参のねじれの

せいだ。

ここ数年、ねじれは参院第一党を野党が
奪うまでに強まり、「決められない政治」
の元凶とされた。一年ごとに首相が交代す
るのも、その不安定さによる影響が大きい
との分析もあった。だが、今、ねじれが完
全に解消された世界を目の前にして感じる
のは「安定」というよりも「不安」の方だ。

首相が憲法をないがしろにし、戦争でき
る国になろうとしているのに、歯止めとな
る装置はどこにもない。主権は国民にあり、
世論調査では集団的自衛権の行使容認には
反対の方が多いの、国民の代弁者として
選ばれた国会議員はその声を反映してくれ
そうにない。対抗すべき野党は体たらく。
伸ばした手は空を切るばかりだ。

ご都合主義と言われそうだが、今では、
熟議を強いた「ねじれ」が懐かしくさえあ
る。政策に興味がなく、自分の権力維持の
ため、民意に迎合すること甚だしかった青
木氏の政治手法も、よりましに思えてくる
から不思議だ。

時間がかかっても、行きつ戻りつして、
ちようどいい落としどころを探るしかな
い。それが民主主義のシステムだ。しか
し、民意の次の揺り戻しが来る前に、かつ
てない強大な権力を握った首相は、どこま
で行ってしまうのだろう。

△由▽